# 産業文化の旅　第六回
## 城塞都市と夢の運河（フランス・カルカッソンヌ市）

武田　竜弥

二〇一六年、フランス南西部のラングドック＝ルシヨン地域圏とミディ＝ピレネー地域圏が合併し、新たな広域行政区、オクシタニー地域圏が誕生した。オクシタニーとは、オック語（オクシタン）が話される地域というほどの意味である。中世のフランスにおいては、北部でオイル語（その一部が現在のフランス語の祖である）、南部でオック語と総称される諸言語が話されていた。しかしパリを中心とするフランス王権の伸長とともにオック語は抑圧され、今日ではその話者数も一〇〇万人を下回るほどになってしまった。オクシタニーという名称には、そうした歴史に抗し、地域のアイデンティティーを守り伝えようとする住民たちの思いが込められている。

カルカッソンヌは、オクシタニー地域圏の中南部に位置する人口四・六万人ほどの町であ

る。その歴史は古く、古代ローマ時代にはすでに城壁を備えた都市が築かれていた。一一～一二世紀にはトランカヴェル家がベジエ、ニームにまでいたる広大な領土を支配し、大きな繁栄を誇った。しかし一二〇九年、ローマ教会が異端カタリ派を征討すべく十字軍（アルビジョワ十字軍）を起こすと、カタリ派を保護していたトランカヴェル家は領地を追われ、カルカッソンヌは一二二六年にフランス王領となった。

フランス王ルイ九世（在位一二二六～七〇年）は、カルカッソンヌに二重の城壁を築いて隣国アラゴン（のちのスペイン）への抑えとするとともに、ここを拠点に南フランスへの支配を強めていった。その後フランスの王権はカペー朝からヴァロワ朝（一三二八年成立）、ブルボン朝（一五八九年成立）へと移り変わったが、強固な軍事要塞と化したカルカッソンヌは百年戦争（一三三七～一四五三年）やユグノー戦争（一五六二～九八年）の戦乱にも耐え抜いた。

しかし一六五九年、ピレネー条約によってスペインとの国境がピレネー山脈に定められると、カルカッソンヌは軍事拠点としての意味を失い、城塞は次第に打ち捨てられるようになっていった。太陽王ルイ一四世（在位一六四三～一七一五年）のもと、オクシタニーにも新たな時代が訪れたのである。それを象徴する事業が、地中海と大西洋を結ぶ夢の運河、ミデ

イ運河の建設であった。

ミディ運河は、オクシタニーの中央部をほぼ東西に貫く形で流れている。地中海と繋がるト一湖からオクシタニーの圏都トゥールーズまで運河の全長は二四〇キロメートル、トゥールーズからはガロンヌ川を下って大西洋に出ることができる。フランス革命までは当時の地名をとって「ラングドックの王立運河」と呼ばれていた。

**カルカッソンヌ城塞**

**オード門**

**サン・ナゼール・バジリカ**

古来、フランスの地中海側から大西洋側に大量の物資を運ぶには、船でイベリア半島を大回りするしかなかった。しかしその航海には多大な時間が掛かるだけでなく、ジブラルタル海峡を支配するスペインへの通行税の支払いや海賊に襲われる危険などもあった。そのため地中海と大西洋を直接結ぶ運河の建設は早くから望まれていたが、そこには二つの大きな問題があり、なかなか実現には至らなかった。その問題とは、一つは高低差、もう一つは運河を満たす水である。地中海とトゥールーズの高低差はおよそ一三〇㍍、しかも両者の間には標高一九〇㍍の高地（スイユ・ド・ノールーズ）があり、運河は「山越え」をしなければならなかった。また夏の南フランスは雨が少なく日差しが強いため、安定的に水を供給できなければ、運河は干上がってしまった。

この二つの問題を解決して夢の運河を現実のものとしたのが、ベジエ出身の技術者ピエール＝ポール・リケである。一六〇九年にベジエの有力市民の子として生まれたリケは、塩税の徴税請負人として財を成す傍ら、独学で土木技術を学んだ。そして一六六二年、時の財務総監コルベールに運河の建設計画を直訴、予備調査と実証実験を経たのち、一六六六年に国王ルイ一四世から勅許を得た。

工事は翌一六六七年から開始された。リケは高低差を克服するために、当時最先端の技術

であったパウンド・ロック（閘門）を用いた。その仕組みは、水路の前後を扉で仕切り、中の水を出し入れすることによって水位を調節するというものである。フランスではロワール川とセーヌ川を結ぶブリアール運河（一六四二年完成）ではじめて本格的に導入された。リケはミディ運河に九〇以上のロックを設け、山越えを成功させた。中でもベジエにあるフォンセランヌ水門は、階段状に連なる八つのロックによって二一・五㍍の高低差を上下する圧巻の規模であった。一九世紀の改修で下から二番目のロックに運河が繋がるようになったので、今日では「七段ロック」の名で親しまれている。

運河を満たす水については、降水量の多いモンターニュ・ノワール山脈の渓谷にダム（サン・フェレオール貯水池）を築き、そこから分水嶺となるスイユ・ド・ノールーズまで水を引いて運河の両側に給水するという方法が採られた。ミディ運河の工事の中でも最大の難所であり、完成までに四年の歳月が費やされた。

もちろん、これだけの工事であるから、要する費用も莫大であった。ミディ運河の建設は国家事業として位置づけられていたが、南ネーデルラント継承戦争（一六六七〜六八年）や仏蘭戦争（一六七二〜七八年）など相次ぐ戦乱のため、国庫にはすべての建設費を賄うだけの余裕がなかった。結局、リケは不足分を私財で負担し、運河の建設を推し進めた。しかし

長期にわたる過酷な仕事はリケの身体を蝕み、彼は運河の完成を見ることなく病に倒れてしまう。跡を継いだ息子のジャン＝マティアス・リケが運河を開通させたのは、父の死から七ヶ月後、一六八一年五月のことであった。

ミディ運河の開通は、南北フランスの物流に革命をもたらした。地中海から大西洋への航路はイベリア半島を迂回するよりもおよそ三〇〇〇キロメートル短縮され、小麦、ワイン、織物など南フランスの豊かな産物が容易に北フランスに届けられるようになった。結果として南フランスは、軍事、政治に続いて経済の面においてもますます北フランスに統合されていくことになったのである。

さてカルカッソンヌであるが、開通当時のミディ運河は、カルカッソンヌ市街の北二キロメートルほどのところを通っていた。市街に引き入れるには迂回が必要で、それに伴う財政負担を市の参事会が認めなかったからである。しかしいざ運河が開通してみると、港を持たないことによる経済的打撃が大きく、市は運河の付け替えを求めざるを得なくなった。紆余曲折の末現在の場所に運河が移されたのは、開通から一〇〇年以上も経過した一八一〇年のことである。その後一八五七年にカルカッソンヌ駅（ミディ運河に取って代わるトゥールーズ～セート線の鉄道駅）が開設されたため、現在では駅の目の前を運河が通る形となっている。運河

をめぐる遊覧船の乗り場もすぐ近くにある。遊覧船では、往時を彷彿させる自然に溢れた運河の景観を楽しめるほか、ロックの通過も体験することができる。

一方、長らく荒廃するにまかされていたカルカッソンヌ城塞は、一九世紀半ばになってようやくその文化的価値が認められるようになった。財政難から一度は中止と決められた修復事業についても、地元出身の歴史家ジャン＝ピエール・クロ＝メイルヴィエイユの粘り強い

遊覧船乗り場

ミディ運河

ロックの注水

活動や当時国の歴史的記念物監督官をしていたプロスペル・メリメ（小説『カルメン』の著者）の提言などがあって、一八五三年にナポレオン三世によって計画が承認された。修復を指揮したのは、パリのノートルダム大聖堂などの修復も手掛けた建築家のヴィオレ・ル・デュクである。デュクの死後は彼の弟子たちが仕事を引き継ぎ、五〇年以上の歳月をかけて城塞は中世の威容を取り戻した。カルカッソンヌ城塞は一九九七年に、ミディ運河はその前年の一九九六年にそれぞれユネスコの世界文化遺産に登録されている。

今日カルカッソンヌは、フランスを代表する観光地の一つとして世界中から多くの人々を集めている。ミディ運河の見学だけなら他にも魅力的な場所があろうが、カルカッソンヌでは二つの世界遺産を同時に見ることができるのである。オクシタニーの郷土料理カスレ（白インゲン豆と肉、ソーセージなどを入れた煮込み料理）にも、カルカッソンヌ独自のレシピがある。また市の周囲には、リムー、マルペール、カバルデス、ミネルヴォワ、ラングドックといった五つの原産地呼称ワイン産地があり、近年評価を高めている。いにしえのオクシタニーの息吹を伝える二つの世界遺産と豊かな食。アフター・コロナの旅先として、ぜひともお勧めしたい場所である。

# Trip to the World of Industry and Culture
# Part 6
## Fortified City and Canal of Dreams (Carcassonne)

Carcassonne is the capital of the Aude department located almost in the middle of the Occitanie region, southwestern France. It is famous for its magnificent medieval citadel (fortified city), which had been restored by the architect Eugène Viollet-le-Duc and his successors since the late 19th century and was classified as a UNESCO World Heritage Site in 1997. But that's not the only attraction of Carcassonne. It has another World Heritage Site, the Canal du Midi, which was classified in 1996. The Canal du Midi is the “Canal of Dreams” which linked the Mediterranean with the Atlantic. It was designed by Pierre-Paul Riquet and opened in 1681. Today the visitors can enjoy various types of canal cruises with the view of the beautiful landscape reminiscent of times past.

武田竜弥 | Tatsuya TAKEDA
名古屋工業大学大学院工学研究科
ドイツ文学・感性社会学
教授